

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.806 2021

2021年5月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

光は暗闇の中で輝いている

ヨハネによる福音書第1章5節a

関西学院大学神学部教授 中道 基夫

「光は暗闇の中で輝いている」という言葉は、「言（ことば）の内に命があった。命は人間を照らす光であった」という言葉に続いており、単なる光の問題ではなく、「命」と関わるものであることが分かります。

しかし、単純に生きていればその命が輝くというわけではありません。ヨハネによる福音書は、人は、自分自身の中に命の光を持っているのですが、人の光は「まことの光」によって照らされることによって、その本来の光は放つことができると言っています。言（ことば）が人間に光、命を与えるのだと言っています。自らががんばって光を放つのではなく、この光が、外から私たちに照らし、私たちの命の光を引き出してくださいということです。現代的にいうならばEmpowerment（エンパワーメント）と言えるでしょう。

聖書ではこの「まことの命」とはイエス・キリストのことを指していますが、具体的にはイエス・キリストとの関係において私たちに与えられた「使命」と言い換えることができます。使命が私たちに生きる意味を与え、私たちの存在に光を与えてくれる。「光は闇の中で輝いている」というのは、この使命を得るときに私たちはどんな暗闇の中にあっても、その闇に消されることなくその光は輝きを増していくということなのです。

では、YMCAの使命、YMCAに連なる私たちの使命とは何でしょうか。YMCAの根本原則である「パリ基準」では、YMCAの使命とは「青年のeffort（努力、取り組み）をassociate（結集する）することである」と謳われています。YMCAの使命とは、青年を、青年たちが自分たちの課題を解決しようとする取り組みをAssociate（アソシエイト）する、結集するということです。YMCAは人々を結びつけるからこそその存在に意味がある。この使命に照らされるときに、YMCAはその本来持っている光を闇の中に輝かせることができます。もしYMCAが、連なる私たちが人々を結びつけることをしないならば、もうYMCAは光を放たなくなってしまいます。

2020年、私たちは暗闇の中にいました。この暗闇の出口はまだ見えていません。各YMCAで、人と接する窓口には透明の幕を張り、アクリル板を立て、消毒をし、人と会わない方法、人と触れない方法、そしてあらゆる行事を中止することに時間と労力を注いできました。そこでは否定的な言葉が語られてきたのではないのでしょうか。「こういうご時世ですから」という言葉は全てを闇に葬ってしまう言葉です。しかしこれからはあらゆる手段を用いて積極的につながるために、私たちはポジティブな言葉、光の言葉を語る必要があります。そのためにはYMCA自身がまことの光に照らされなければなりません。暗闇は作り出されるものではなくて、火を灯さないところに暗闇が生まれるのです。暗闇の中でも一本のろうそくさえ灯っていれば、それはもはや暗闇ではありません。YMCAの使命という光をそれぞれの現場で灯していきましょう。

2021年2月23日第21回日本YMCA大会閉会礼拝より

（日本YMCA中期計画策定委員長・神戸YMCA理事長）

第10回
日本YMCA同盟協議会

2021 6/19^土
13:00-16:00

Zoomによるオンライン形式で開催

プレセッション

コロナ時代を生きる—YMCAは社会の回復に応えられるか
今、あなたに問う-日本YMCA中期計画（2021-2023）に向けて

2021 4/23^金 5/21^金 ともに19:00-20:30

Zoomによるオンライン形式

テーマ 4/23 これからの健康概念・ユースエンパワーメント

5/21 テクノロジーとパートナーシップによる地域社会の課題解決





2020年度にオンラインを含む全国25カ所のYMCAで開催されたAmazon Future Engineer。多様な環境に身を置く青少年に、IT・プログラミングを学ぶ機会を平等に提供することを目指して、Amazonとライフイズテック、YMCAがパートナーとなり、未来を担う子どもたちに「誰もがテクノロジーで世界を変えられる」と実感できる体験を届けています。3月28日には全国4拠点をオンラインでつなぎ、誰でもどこにいても参加することができるアッセンブリーを開催しました。

小中学生のプログラミングクラスの紹介とWebサイトの発表



テーマは「はなれていてもつながっている。子どもたちが考える防災、いのちを守るために」。

YMCAせとうちでは、2018年の西日本豪雨災害支援プログラムとして、倉敷市真備・平島から16名の小中学生が参加、「このテクノロジーを自分のためだけではなく、誰かの幸せのため、または誰かの命を守ったり救ったりするために使うとしたら、どんなことができるだろうか?」とグループで考えました。自分の被災体験から、「水害に遭っても被害を免れるように水に浮く家があれば」「地震のエネルギーに対して、それを打ち消すエネルギーを出す装置があったら」「ドラえもののタイムマシンがいい」など、色々なアイデアが出てきました。制作したWebサイト紹介には「自分の被災体験とそのときに心の支えとなったことを、自分だけのものとせず、誰かにこのことを伝えたいというのはとても素晴らしい」「自分の好きなことをとことんやっていった先に、世界を変えるということもある」と子どもたちへのエールが届けられました。

ひろげる

高校生による社会課題解決のアイデアをかたちにするWebサイトの発表

今の高校生が、社会に対してどのような課題を持っているのか、それを解決するために具体的にどのようなアイデアを持っているのか、アイデアとして持つだけではなく、アウトプットするためにWebサイトにしていきます。約50名の参加者から3組(4名)が発表、発表者の1人甘利直花さんは、「自分の思いを形にできる高校生を増やしたい」というビジョンのもと、日本の高校生と世界の起業家が協力しより良い世界への一歩を踏み出すためのプロジェクトのアイデアを、Webサイトにまとめ発表しました。

深める

当日の運営・配信を担当した高校生チーム



10年前に東日本大震災支援として行われた東京YMCA三菱フレンドシップキャンプ参加者が、福島のAFEに参加。「10年前のキャンプでは、とても癒されたことを覚えています。YMCAと聞いて懐かしくて申し込みました」という保護者の方とのうれしい再会もありました。

YMCAとの再会

オンラインで交流

それぞれの県の「一番有名な食べ物」をお互いにパソコンで調べてチャット(会話)機能を使って発表。福島のいかにんじん、岡山の桃、熊本のからしれんこんなど初めて聞く当地グルメの写真にみんな興味津々でした!

福島県郡山市
岡山県倉敷市
熊本県熊本市

Webサイト制作

「被災したとき折り紙に助けられたことがあったので、折り紙のサイトを作りました」。自分の好きなものをWebサイトにすることは、テクノロジーを用いて自分の心の中にある宝物を誰かに伝えるというコミュニケーションです。



子どもたちの願いを込めて ピンクバルーンリリース!

私たち沖縄YMCA児童クラブでは、いじめや差別のない世界を実現しようという気持ちを多くの方に届けるために、子どもたちのいじめや差別のない暮らしを願う気持ちを込めたメッセージを広く伝えることができるイベントを模索していました。そうした中で企画したイベントが今回のピンクバルーンリリースだったのです。

当初は、ピンクシャッターに合わせてイベントを行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、2月末にイベントを行うことはできなくなってしまいました。それでも、新型コロナウイルス感染拡大による鬱屈した昨今の雰囲気、子どもたちの笑顔とともに明るいものにしたいと考え、時期を移して、3月27日にピンクバルーンリリースを行いました。

沖縄の空に放たれたピンクバルーンには、子どもたちが書いた次のようなメッセージが結び付けられていました。

「コロナウイルスがなくなり、この世から病気で苦しむ人がなくなってほしいです。みんなが悲しまないですむ、けんこうで、いじめやあらそいもない世の中になってほしいと思います。みなさん、がんばりましょう!」(神原小学校3年 岩瀬莉都さん)

この日、ピンクバルーンは子どもたちの願いと笑顔を運ぶかのように、空に勢よく飛んでいきました。

沖縄YMCA児童クラブ 安永 伴吾



リーダーシップを発揮する女性

COVID-19の世界で平等な未来を実現する

国際女性デー バーチャルシンポジウム

3月8日の国際女性デーを記念し、コロナ禍の世界における平等な未来を実現をめざした女性のリーダーシップに関するシンポジウムが開催されました。世界YMCA会長パトリシア・ペルトン氏、インドのキリスト



教女性運動家アルナ・ナナダサン博士、アジア・太平洋YMCA同盟総主事ナム・ブーウォン氏をスピーカーに迎え、オーストラリア、バングラデシュ、カンボジア、カナダ、香港、インド、日本、韓国、ラオス、マカオ、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、スリランカ、スイス、台湾から約45人がシンポジウムに参加しました。

それぞれのスピーカーからは、YMCA運動における女性のリーダーシップに対して、モデルや構造、方針や戦略などを再検討するためのたくさんの示唆が与えられました。パトリシア・ペルトン氏が引用した北米YMCA会長ケビン・ワシントン氏の言葉のように、「多様性という視点からも、私たちは物事のさまざまな側面に目を向けることが大切」なのです。

男女平等参画社会に向けたYMCAの取り組みは、まだ決して十分ではありません。世界YMCA同盟総主事カルロス・サンビー氏は、世界YMCAは国際機関として、ジェンダー平等を確実にするために歩み続けることを約束しました。ジェンダー平等とは、すべての人権が守られることでもあるのです。そしてYMCAのすべてのリーダーがともに成長していくこと、その実現のために一歩を踏み出すこと、そのことにきちんと向き合うことが、私たちの社会を変化させるに違いありません。